

# 札幌支部活動報告

## 1. 活動方針

### 「新研究主題の具現化を目指した研究推進・札幌研究大会の開催」 ～新学習指導要領の移行期を踏まえて～

平成29年度は、第53回北海道学校体育研究大会の成果と課題を踏まえ、各ブロック授業を行うことができた。特に札幌研究大会では、中学校ブロックが担当し、小学校と中学校が連携を図ることで大きな成果を挙げる事ができた。

さらに、例年行われている研修会2つ（夏季実技研修・冬季学習会）に加え、29年度からの取組である出前研修を中央小と発寒東小で行った。講師は研究部員が務め、参加された先生方の笑顔が見られる研修会になった。そこで、平成30年度も出前研修に力を入れていく。

研究推進では、新学習指導要領の学習会や冬季学習会で行った「次期研究に向けてのグループディスカッション」で交流を図り、新研究主題設定につなげることができた。平成30年度は、研究大会、ブロック授業において新研究主題の具現化を目指していく。

## 2. 第28回札幌市学校体育研究連盟研究大会について

### (1) 授業について

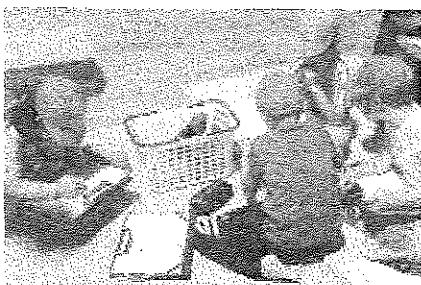
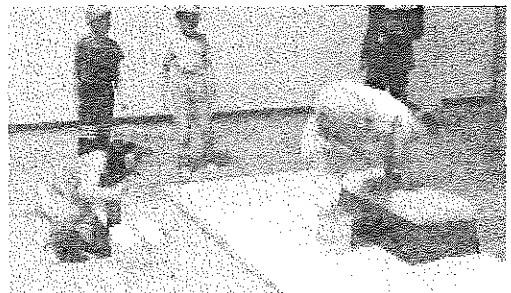
「第28回 札幌市学校体育研究連盟 研究大会～北九条小学校」について

【公開授業】 授業者 村上 雅之 教諭

「マット運動」

助言者…中島 寿宏様（北海道教育大学准教授）

助言者…岩田 悟様（札幌市教育委員会指導主事）



「マット運動がもつ感覚的な面白さに浸ること」「体の動かし方や場・用具の違いによる体への気付きを通すことで、マット運動の技へと徐々になっていくこと」をねらいとして、構成・展開された単元となった。自身の運動する「感じ」を追究することができるようにし、そこから技能的なポイントを自覚し進んで学びを深めていけるように、教材化した。

本時は、支持での川跳びや腕立て横跳び越し、側方倒立回転につながる運動を扱い、「ピョーンの感じ」を味わえているかどうかを焦点化して、個々の課題を追究できるようにした。

## (2) 成果と課題について

### 視点1 深い学びを生むための教材化と学習過程

- 「感じと気付き」のアプローチは、「主体的、対話的で深い学び」につながる具体の姿として、提案性のあるものだった。子どもが、どのように学ぶか、「主体的に学習する過程」について焦点を当てた授業を実現していた。
- 課題を生むために、跳び箱1段に足を乗せて逆さになる活動を行い、「ピョーン」の定義付けをしたことがよかった。
- 「ピョーン」を感じるために子どもたちは主体的に様々な場所で「川跳び越し」に取り組むことができていた。自己選択で場を工夫し、活動することができたので、運動の得意不得意によることなく、どの子も伸び伸びと運動に浸ることができていた。
- 「器械運動」の入り口である3年生において、自分たちで場や用具を工夫して活動していくことの基礎・基本をしっかりと学べていた。
- たくさんの用具や場が準備されていたが、それらの使用方法の理解が不十分だったため、効果的に活用することができない様子のグループもあった。また、場づくりの時間が多かったため、実際に運動する時間が少なくなっていた。場や用具の使い方や工夫については、もう少し整理した方がよかった。
- 一人一人の「ピョーン」に対して、動きの変容や思考の変容を実感できる場がもう少し必要であった。

### 視点2 深い学びを生むための教師の関わりと評価

- 教師は、子どもたちが行った用具の工夫について、その意図を聞きながら、用具や場の使い方のヒントを伝えたり、アドバイスしたりしていた。また、子どもたちが感じた「ピョーン」を共感的に聞き、思考に寄り添う関わりを積極的に行っていた。技のポイントやコツを指し示す言葉かけを控えたことは、子どもたちをより主体的に自覚的に「感じ」と「気付き」に向かわせる手立てとなっていた。
- 子どもたちがグループ内で、積極的に自分の「ピョーン」の感じについて話したり、聞いたりしていた。
- 本時は、課題解決をグループでの活動で構成したが、「ピョーン」に対する子どもたちの思考を整理したり、広げたりするためには、全体での交流、あるいは数人での交流を意図的に設定する必要があった。3年生という発達段階に合った交流の在り方としても再考が必要。
- 場や用具を変えても、動きに変化のない子は、思考が停滞している様子があった。思考を深めていくには、動きの変化や技能の伸びを実感させる教師の関わりも必要。また、よい動きやよい思考への価値付けをもっと積極的に行うことが必要だった。
- 子どもに身に付けさせたい力（「感じ」を「気付き」につなげることで、動きに変化を生む）を明確にして獲得できるようにすることが大切である。

### 【今後に向けて】

今回の授業は、学習者の視点に立って授業構築をしてきた。新研究主題「分かる・伸びる・関わる」体育活動の充実の具現化を目指し、今までに行ったことのないチャレンジする内容の授業となった。今回の成果と課題を今後行われる5・6ブロック授業公開に生かしていきたい。